たるべき事。

一、封賃小判一兩は錢拾二文、二兩より五拾兩迄は二拾四文、五拾兩より百兩迄は四拾八文、一歩一切より三切迄は六文、四切より七切迄は拾二文、八切より百切迄は二拾四文、百切より四百切迄は四拾八文、丁銀五拾目以上は拾二文、五拾目以下は六文たるべき事。

附、包直之封賃は六文たるべき事。

一、京都爲替銀百目について、歩間五分之内、四分は爲替人取候者、一分は彌右衞門・喜兵衞・吉兵衞に可被下之事。

一、金子幷金具之金銀等、兩替座之者共目利いたすべし。金銀金具懸目相改儀は、御扶持之手代、兩替座之者共立合可相勤事。

一、御土藏ゟ罷出候手代九人之内、替々一人充小拂所ゟ參出、御用可勤之事。

一、封之上に預り之印押之、其外銀座之鞏印判、幷かね見之印判可押添事。

一、於御土藏封付申六人之手代、右之印判之外、一人充替々印可押副事。

附、於諸役所金銀包封付仕べし。此外半銀等懸申儀差除候事。

一、封賃錢之儀、其時々相場次第に賣拂、以銀子御土藏へ可上納事。

一、包直封之儀、内に銅・鉛等之交銀有之而、指越所慥に知れ申においては、當座に打つぶし、銀主損失たるべし。若來所不慥においては、卒爾に似せ銀打つぶし不申、町奉行所ゟ可及斷事。

一、御土藏ゟ罷出手代六人・同かね見三人之御扶持銀、一人に付而銀六百目充、小拂所より請取之、可相渡事。

一、かね見八人之御扶持銀、一人に付而銀六百目充被下之間、封賃銀之内を以可相渡之。封賃不足においては、先小拂所より請取、至翌年之春、封賃之内を以可致返上事。

附、右八人之内、小松・七尾・宇出津・今石勤・魚津五ヶ所之銀座ゟ、手代役を兼一人宛可指遣事。

一、年中以封賃銀之内、爲御扶持一人に三貫目宛被下之候條、此内を以、手代幷小者給銀・飯米等萬端入用に拂べし。爲替銀御用之入用、其外於銀座諸事入用引取、相殘銀子町奉行迄及斷、諸方御土藏ゟ差上、至春可遂勘定事。

一、爲當分之御用、御領國之内ゟ手代指遣においては、入用是又以封賃銀之内可引取事。

一、封賃銀、歳之暮皆納難成においては、至春不苦事。

一、銀座勘定入拂證文無之に付、如先規鑢社之起請文上置、可遂結解。勿論手代幷かね見に制詞可申付事。

一、所々銀座入用之儀、於其座以封賃銀之内可引取之。但、手代給銀入用銀共に、其座之賃銀於不足は、金澤銀座賃銀之内に而可引取事。

右所載條目之外、滯品於有之者、受町奉行指圖可支配者也。

元祿八年二月廿九日　　出雲

登岐

左衞門

九郎左衞門

駿河守

安房守

本吉屋　彌右衞門

香林坊　喜兵衞

越前屋　吉兵衞

一七　町方火之用心之儀御定

覺

一、町方火之用心、彌無油斷、晝夜之番等懈怠不仕候樣に、堅可被申付候。地子町小家多所、別而火之用心惡敷躰候條、猶以油斷無之樣に可被申付事。

一、爲火之用心番、如跡々增廻番、其外御横目不絶町廻候樣申渡候間、可被得其意事。

一、町足輕共、彌無油斷致町廻、若火之用心不沙汰に仕もの有之候はゞ、可爲致牢舍旨堅可被申付事。

一、風吹候刻は、不依晝夜、やねゟ水を打、人を上置、風止候迄夜中茂臥不申、火之用心堅可仕事。

一、火之用心不致油斷候得共、不慮に火を出し候歟、又は火を付られ候共、早速見付消候者、少茂越度に而有之間敷候間、隣近所之者をもよばはり、情を出可成程火を消可申候。或は隣ゟも不申聞、或は道具をのけ、火消申儀不情成族於有之者、縱後日に相聞候共、急度曲言に可被仰付候。